０６／１０／２９　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：信仰の点検
聖書箇所：コリント人への手紙１１章２３－３２節

　１９９５年1月１７日、何か思い出されますか？５時４６分、阪神淡路大震災です。１１年前の出来事です。考えて見ると、私たちはあの時のことをよく覚えています。でも、実際のところもう忘れてしまっている、その時の恐怖などもうとっくに忘れてしまっています。先月アメリカにいたときも、ニューヨークであの大きなテロ事件があってから５年が経ちましたが、もう皆忘れてしまっています。私たちはすぐに忘れる者です。このことは信仰においても同じです。私たちは同じことを繰り返していると、いつの間にか「何のために」しているのかを忘れてしまう、私たちの信仰の歩み自体がいつの間にか形だけのものになってしまっているのです。この問題は私たちだけの問題ではありません。どこの国に行っても人々は同じ問題を抱えているし、そして、聖書を見る時、私たちの先輩たちも同じような失敗を繰り返してきたのです。
　今日、皆さんに見ていただきたい聖書の箇所は、Ｉコリント１１章です。パウロはこの１１章の初めのところで、コリントの人々を誉めています。１１：２**「さて、あなたがたは、何かにつけて私を覚え、また、私があなたがたに伝えたものを、伝えられたとおりに堅く守っているので、私はあなたがたをほめたいと思います。」**と。ところが、パウロは同じ１１：１７では**「ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。」**と、このようなことを同じ１１章の中で言っているのです。つまり、このコリントの教会の問題は、確かに彼らはパウロから教えられたことを継続して行なっているのですが、いつの間にか何のためにそれをするのかという、その目的もかつてもっていた熱意も彼らは失ってしまっていたのです。主が昇天されてから、２５年ほど経っています。もうすでに、彼らの信仰の歩みは悲しいことにあるべき姿から離れてしまっていたのです。教会の中にはいろいろな問題がありました。
◎コリント教会の問題
分裂：その一つは、教会の中にある不一致でした。１章を見ると、教会の中に様々な分派が存在していたことをパウロ自身があげて嘆いています。１：１２に**「あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく。」「私はアポロに。」「私はケパに。」「私はキリストにつく。」と言っているということです。」**と言っています。つまり、教会の中に「私はパウロ派、私はアポロ派、私はケパ、すなわちペテロ派、そして、私はキリストにつくキリスト派」とそのような分派が出来ていたのです。実は、それが教会の一致を乱していました。それがこのコリント教会の大きな問題だったのです。しかも、その教会の不一致が、実は今日私たちが見ようとしている１１章の中に記されているのです。１７節、先ほど見ましたが**「あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっている」**とパウロは非常に厳しいことを言っています。１８節には**「まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、あなたがたの間には分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。」**、続いて１９節から**「:19 というのは、あなたがたの中でほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむをえないからです。:20 しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。:21 食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。:22 飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あなたがたは、神の教会を軽んじ、貧しい人たちをはずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません。」**と、この教会の中にあった問題をパウロは具体的に教えてくれています。つまり、教会の中に先ほど見たように四つの大きなグループが存在していただけではない、裕福な人々とそうでない人々との間にも様々な問題があったのです。というのは、彼らは聖餐式を行なったのですが、その聖餐式の前か後かに愛餐を行ないました。愛餐とは、兄弟姉妹が愛を分かち合うときです。それぞれが持ち寄った食事を分け合うことで神の愛を示し、互いの交わりをもって励まし合ったり、いたわり合ったりする時でした。しかし、そこに大きな問題がありました。皆、めいめいが食べ物を持ち寄りますが、特に裕福な人たちはたくさんの食事を持って来ます。しかし、貧しい人たちは持ってくることが出来ません。裕福な人たちは自分たちだけで集まって自分たちが持参したもので飲み食いして、片隅には貧しい人たちがいて、彼らは食べるものが何もなかったのです。ところが、裕福な人たちは貧しい人たちが空腹を抱えていても、彼らのことなど気に掛けることも関心を示すこともなかった、他人を気遣うことがなかった、非常に利己的でした。本当はすばらしい交わりのときであるはずの愛餐が、分裂をより大きくする原因になっていたのです。しかも、愛餐を初めに行なったとすると、その愛餐の後で彼らは聖餐式をもったのです。つまり、パウロは、そういう状態であなたたちは主の聖餐を守っている、確かに、形は聖餐式を行なっ

ているけれど、実は、神はそのような聖餐を喜ばれない、主に対する畏れを失っている、そのようなことを神は喜ばれないと言うのです。２２節を見ると**「このことに関しては、ほめるわけにはいきません。」**とパウロは言っています。

罪：なぜ、**「ほめるわけにいかない」**とパウロは言ったのでしょう？２７節から見て行くとそのことをパウロはもう少し詳しく教えてくれています。確かに、皆で集まって聖餐式をしていました。キリストのからだの象徴であるパンを取り、キリストの血の象徴である杯を飲んでいた、しかし、彼らの心は神の前に正しくなかった、だから、パウロは言います。２７節**「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。」**と、そのような間違った心の態度によって形だけの行為を行なうことは罪だと言うのです。なぜそれが罪なのでしょう？

パンと杯を取る：この後、私たちはパンと杯をいただくのですが、皆さんに考えていただきたいことは、私たちがパンと杯をいただくとき何をしているのかということです。それは、私の罪のために十字架で死んでよみがえってくださったイエス・キリストのことを心から感謝しているのです。イエス・キリストによって与えられたその救いを感謝するのです。ですから、どうして神が憎んでおられる罪をもちながらそのような感謝を神にささげることができるでしょうか？なぜなら、神は私たちの心の中のすべてを見ておられるのです。私たちの感謝が偽りであることを神は見ておられるわけです。私たちは兄弟姉妹の前でこのように言っているのです。「私には罪がありません、私はあなたの前に罪を犯していません」と公に宣言しているのです。だから、神はそれに対して、その行為を、確かに信仰の行為に見えるかもしれないが、それを喜ばれないと言うのです。どんなに立派な行為を行なっていても、私たちの心が神の前に正しくなければ、その行為は神に喜ばれないし、受け入れられないのです。そのことをパウロはここで警告するのです。

さばきをもたらす：ですからパウロは、そのような罪を犯している人に対して神の厳しい懲らしめがあると言います。２９節には**「みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。」**とあります。そして、３１－３２節にも**「しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。:32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。」**と、何度も「さばき」ということばが出てきています。しかし、ここで使われている「さばき」というのは、３２節にある**「罪に定められること」**、それとは違う「さばき」です。パウロが３２節に**「私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられる」**と言っています。このさばきはクリスチャンに対するものです。未信者に対するさばきではありません。つまり、今見てきた「さばき」は、神からの懲らしめのことだと言うのです。その「懲らしめ」というのと**「この世とともに罪に定められる」**、つまり、神の救いを受けていない人々が罪をさばかれ、永遠の地獄に行くという、その「永遠のさばき」とは違うということです。ですから、パウロが言いたいことは、この教会の人々に対して、あなたたちはイエス・キリストによって罪が赦されたのだから、赦されていない人々と同じように永遠の罪のさばきを受けることはないけれど、罪を犯しているなら、神の懲らしめがあるのだということを言っているのです。

どのような懲らしめがあるのでしょう：その懲らしめに関してパウロが言ったことは、３０節**「そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」**と、神の前にクリスチャンが罪を犯し続けて、その罪を悔い改めないために、弱くなったり、その人に病気が訪れたりとその結果が記されています。覚えてください、病気が必ず罪の結果ではありません。ヨブの友だちはそう思いましたが、必ずしもそうではありません。神の祝福でもあります。しかし、罪のゆえに病気を経験することも確かに聖書は教えています。しかも、**「死んだ者が大ぜいいます」**というのは、その罪を悔い改めないために、神はこの世のいのちをその人から取られることもあるのです。死を経験することもあるのです。

懲らしめの目的：なぜ、神はこのような懲らしめをしようとするのでしょう？ヘブル１２：１０に**「なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。」**とあるように、私たちイエス・キリストを信じている一人ひとりが正しい道を歩んで行くように、神の聖さにあずかるためです。つまり、この「懲らしめ」というのは罪を犯しているクリスチャンに対する神の愛です。あなたが神の前を正しく歩むことによって、神のすばらしさを世に証して行くために、神があなたを正しい方向に戻そうとしてくださっているのです。しかし、パウロは警告します。イエスを信じて罪赦されていながら、罪の中を歩み続けているなら、このような報いがその人に訪れる可能性があると。ですから、まずパウロはここで、聖餐式を守るという、見た目は立派な行為だけれど、罪をもったままそのような行為をしているその信仰者たちに、あなたたちは自分の心を吟味しなければならないということを警告し教えたのです。

◎パウロが愛餐、聖餐式を行なうことに関して与えた注意とは？

吟味する：２７節で**「ふさわしくないままで」**、２９節**「みからだをわきまえないで」**と、自分自身を吟味することがない、そうではなく、２８節で**「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、…」**、３１節でも**「しかし、もし私たちが自分をさばくなら、…」**と、つまり、自分を吟味するということです。自分のうちに罪がないかということをしっかり吟味した上で、神の前に仕えて行きなさいと言うのです。ですから、このコリントの教会が抱えていた大きな問題は、今、みことばを通して見ました。形だけの信仰者、行為は行なっているけれど心が伴っていないということです。罪をもったままパンと杯を受けてはならないとパウロは言います。そうすると、私たちが為す奉仕についても同じことを考えなければいけません。礼拝に来るけれど、あなたの心が神を礼拝するような心の状態であるかどうかです。あなたが日々の生活を為すとき、本当に主に仕えるものにふさわしい心の態度をもって歩んでいるかどうかです。どんな奉仕をするにしても、あなたがささげものをするにしても、何をするにしても、神が関心をもっているのは、あなたがどんな心でそれをしているのかです。だから、私たちはこのような聖餐式という時間を通して自分の心を吟味するのです。私たちは常に自分を吟味しなければいけないのですが、神がこのような礼典を定められた目的は、自分の心を吟味するためです。

一つ付け加えるとすると、私はこの数ヶ月の間、信仰とはいったい何だろうと考えていました。私たちの信仰は、創造主なるまことの神と信者である私の直接的な生きた交わりです。だから、家族のだれかが信じたら家族全員がクリスチャンになるというではありません。子どもの頃から教会に来ているからクリスチャンになるというのでもないのです。つまり、これは神と自分との個人的なつながりです。だから、私たちの信仰は宗教、すなわち、人間が生み出した、人間の教えを熱心に守る宗教、そのようなものではないのです。でも、悲しいことに、いつの間にか私たちの信仰が、生きた神との直接的なすばらしい交わりが、何かの教えを守ることに取って代わってしまうことがあるのです。つまり、神との交わりを楽しむのではなくて、人から言われたことや何かを一生懸命守り続けて行こうとするのです。これは私たちの信仰の宗教化だと思います。私たちの信仰は宗教ではない、人間が考え出したものではない、創造主なる神との直接的な交わりなのに、それを他の宗教と変わらないものに変えてしまうのです。こういうことをしているから大丈夫、礼拝に来ているから大丈夫、ささげもの、献金をしているから大丈夫、祈っているから大丈夫と、そういう行ないだけに私たちの目がいってしまって、神との個人的なすばらしい交わりをいただいていることを楽しんでいないのです。このことは私たち人間の問題だと思います。どこの国でもあっても、どの時代であっても…。なぜなら、その証拠に、時間とともに私たちの神に対する感謝や喜びが過去のものになってしまって、毎日のことをただこなしているだけという、そのような信仰者になっていませんか？確かに、祈りをしている、聖書を開くこともある、礼拝にも来ている、賛美もささげている、問題はあなたの心がどこにあるのかです。あなたの心が生ける神と交わっていることを喜び、感謝し、その方を心から崇めようとしているのかどうかです。そうでなければ、私たちはこのすばらしい神との交わりという祝福を、くだらない宗教と同じように引き下げてしまっているのです。

このコリント教会に起こった問題はまさにそうです。いつの間にか神との個人的なすばらしい交わりが宗教になったのです。ですから、何を行なっていても無味乾燥です。何をしても喜びがない、だから、パウロはその人々に対して、もう一度、彼らが思い起こさなければならないことが何なのか、私たちの日々の信仰生活が神との生きた交わりを楽しみながら喜びながら歩んで行くために何をしなければいけないのか、そのことを教えてくれるのです。あなたの信仰がもう一度よみがえって来るために何が必要なのか、そのことをパウロは教えてくれるのです。ですから、これからそれを見て行きます。願うことは、皆さんの信仰がそれによって変わることです。生きたものに変わって行くことです。

☆神が望んでおられる信仰者の心の態度、姿勢について学ぶ　　２３－３２節

１．神の命令

２３節から**「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、:24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」　:25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」**。

（１）行いなさい

２４－２５節に書かれている**「…これを行ないなさい。」**という命令です。ですから、私たちイエス・キリストを信じている者にとって、聖餐式に出る出ないはどちらでもよいことではないのです。これは神がクリスチャンに命じておられることです。クリスチャンがしなければならないことです。教会はバプテスマとともにこれを守り続けて行かなければならないのです。それだけではありません。

２．相応しい態度

（1）わたしを覚えて

同じ２４－２５節に**「わたしを覚えて、」**とあるのは、今見て来たように、ただその行為を行なったらそれでいいのではないのです。聖餐式をどのような態度で行なっているか、それが問題だと言うのです。**「わたしを覚えて、これを行ないなさい。」**と言われているその意味を、私たちはしっかり知らなければいけないのです。パウロが言う**「わたしを覚えて」**というのは、生き生きとした目に見えるような真に迫った経験として思い出すということです。何となく過去の歴史を振り返ってみてそんなこともあったなぁというようなものではないのです。私たちが聖餐式につくときに、イエス・キリストがどのようなお方であり、私のために何をしてくれたのかというその事実が自分の前で、生き生きとした目に見えるような真に迫った経験となることが必要だと言っているのです。多くの人々は「知っていますよ、イエス・キリストは十字架にかかって死んだのでしょう」とさらりと言いのけてしまいます。黒崎幸吉という神学者は文語体ですがこの箇所でこのように言っています。非常に面白いと思いました。「而して（しこうして）信者は之を食ひ、この式を行なふことにより『キリストを記念し』彼を思ひ起こすの幸を味わふことができる」と。彼が「彼を思ひ起こすの幸を」といったこと、つまり、彼にとってキリストを思い起こすことは自分の幸いだったのです。イエスのことを考えることが自分にとって幸せだったのです。皆さんはどうでしょう？イエスがどういうお方であり、私のためにどんなことをしてくれたかを考えることによって、皆さんの心は高揚しますか？心が熱くなってきますか？神さま感謝します！と私たちの心は喜びと感謝にあふれてきますか？

・<u>いのちを捨てられたお方はどのようなお方でしょう？</u>

私たちが思い出さなければいけないことは、私たちのためにいのちを捨ててくださったこのお方はどのようなお方であるのかということです。

すべてのものをお造りになった創造主なる真の神
すべての被造物により、畏れられる唯一のお方
すべての被造物により、ほめたたえられる唯一のお方
すべての被造物により、崇拝される唯一のお方

これが私たちの神です。そのようなお方が私たちを見てくださり、私たちのために犠牲を払ってくださったのです。

・<u>このお方はどのような犠牲を払われたのでしょう？</u>

イエスの苦しみ：寒い獄中に捕らわれピラトの前でむち打たれました。なぜでしょう？創造主がなぜからだから血を流すのでしょう？

イエスの辱め：どれほどの辱めを彼は経験したのか、ご自分が造られた被造物である人間の前で、彼はバカにされ、あざけられました。

イエスの孤独：私たちは自分は孤独だと言っても、イエスが味わった孤独など味わったこともない、愛する者から裏切られ、だれもこの方のことを構おうとしない、

イエスの悲しみ：イエスはいのちがけで彼らのことを守って来られたのに、彼らのことを一生懸命考えて来られたのに、彼らの幸いのことをいつも考えて来られたのに、私たち被造物は何をしたのでしょう？この方より自分のことが大切だったのです。どのような孤独を、どのような悲しみを経験されたことでしょう。

イエスの失望：さばきに出たときイエスは一人でした。どこに行ったのでしょう、人々は？イエスの奇蹟を見た人々は？イエスのすばらしい祝福をいただいた人々は？イエスは失望されたかもしれません。約３年半ともに過ごした弟子たちは皆逃げて行ってしまった…。

（2）吟味すること、食べること、飲むこと

２８節に**「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」**とあり、これも神の命令です。パウロがここで教えてくれていること、みことばが私たちに言うことは、あなたは主の前に来るときは、その方がどんなお方であるかを覚えなければいけないということです。今あなたはどのような方の前に立っているのか、どんな方があなたを見つめているのか、どんな方があなたの心を見ておられるのか、あなたの神がどういうお方かを覚えなければいけないと言うのです。

（a）自分と主との関係を覚える　―　新しい契約

２５節**「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」**と、私たちは神と新しい関係にあることも覚えなければいけません。**「新しい契約です」**と言われました。神がイスラエルと結んだ古い契約によって、イスラエルは神の民となり、神はイスラエル人の神となられました。古い契約です。その時に、人々は律法を守らなければいけないという条件がありました。神との関係を維持して行くためには律法を守ることが不可欠だったのです。でも、だれも律法を

守ることはできませんでした（出エジプト２４：１－８）。ですから、彼らは常に不従順の罪に問われていたのです。これが古い契約のことです。しかし、神のひとり子であるイエス・キリストがこの世に来てくださり、十字架の上でご自身の血を私たち罪人のために流されたことにより、すなわち、言い換えると、私たち罪人の身代わりに死んでくださったことにより、主イエス・キリストは罪の赦しを備えてくださった、そして、これまでのように律法に基いてではなく、イエス・キリストを信じる信仰によって、信じるすべての者との間に新しい契約を結んでくださったのです。それは、この神が永遠に私の神となり私は永遠にこの神の民となるという契約です。あなたがイエス・キリストを信じたときに、あなたは神とのすばらしい関係の中に招き入れられたのです。このすべてを造られた創造主なる唯一の神はあなたの神であり、あなたはこの神の民となったのです。それは、律法を守るという条件がついているのではありません。キリストの贖い、救いのゆえに、私たちはそのような関係に招き入れられ、その関係を私たちは失うことがないのです。そうすると、私たちが考えなければいけないこと、私たちがこの聖餐のテーブルにつくときに覚えなければいけないことは、私はこの神の民としてふさわしい生き方をしているかどうかです。あなたは神の民になると言っているのではありません。イエスを信じたあなたは神の民となったのです。それなら、あなたは神の民にふさわしい生き方をもって神を崇めているかどうかです。ですから、私たちは聖餐式につく前にそのことを覚えなければならないのです。

２．私の主に対する責任

同時に、私たちは神から与えられている関係だけでなく、責任も覚えなさいと言います。２６節に**「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」**と、ここに二つの責任が教えられています。

（１）キリストのすばらしい救いを宣べ伝える

「主の死を告げ知らせるのです。」と言われています。どうでしょう？イエス・キリストの福音を伝えておられますか？それはあなたに神が与えられた責任なのです。あなたがもしイエス・キリストと新しい関係に入ったなら、もし、この創造主なる神があなたの神であり、あなたがこの神の子であるなら、あなたにはこんなことを神は期待しておられます。それは「出て行ってキリストを伝えなさい、救いのメッセージを伝えなさい」ということです。皆さんは家族の救いのために祈っておられます。私も祈っています。それが起こることを私は信じます。そして、同時に、そのように家族のために、友人のために、救いを祈っている皆さんを神は使ってくださって、このすばらしいメッセージが届いて行くように祈っています。それが私たちに与えられた大きな責任だからです。

（２）主の再臨を待ち望むことが必要

私たちがパンと杯をいただく度にいつも覚えなければいけないことは、主の再臨が必ず来るという約束を覚えることです。なぜなら、それを覚えるときに、私たちは今日神の前に正しく生きる者となるからです。これは事実です。イエスは今日帰って来られるかもしれない、そのことをしっかり覚えている人は、今日神の前に正しく生きようとします、今日、価値ある日を過ごそうとします、今日、悔いのない日を過ごそうとします。皆さん、この聖餐の式につく度に私たちがしっかり覚えなければいけない責任は、私はキリストの福音を人々に語っているかどうか、もし、語っていなければその罪を主に告白して、主よどうぞ、今日から私を使ってくださいと主の前に出ることです。そして、主の再臨を待ち望んでいなかったとするなら、明日もある、あさってもあると思って生きているなら、神さま、それは間違っていた、今日がこの地上の最後の日かもしれないと、今日、与えられていることを主のために正しく為して行くことができるように、今日、主が与えてくださったこの日を無駄にすることがないようにと、よく考えて間違っているところは主に告白して改めることです。

いつもこのようにして自分の信仰を吟味することが大切なのです。なぜ、神が聖餐式を命じられたかお分かりになったと思います。神はご存じなのです、私たちがすぐに忘れるということを、すぐに形だけのものになってしまうということを、何のためにしているのかをすぐに忘れてしまう者だということを。だから、こうしてパンと杯をいただく度にもう一度あなたは自分の信仰を吟味しなさいと言われるのです。罪がないかどうか、神から与えられた責任を果たしているかどうか、というのは、私たちの人生は神のものです、私たちのこの地上での歩みは神が与えてくださっている、それは私たちが私たちのすべてをもって神に感謝を表わすためです。信仰の先輩たちはそのように生きました。たとえば、

ダビデ：彼は神の前に大きな二つの罪を犯します。姦淫の罪と国勢調査、人口調査を行なったのです。それが罪だったのは、自己満足的な高慢から彼はそれを行なったからです。そのとき、預言者ガドがダビデのもとにやって来て、三つの災いのうちどれを選ぶかとダビデに言います。一つは７年間の飢饉、もう一つは３ヶ月間ダビデの仇が彼を追いまわす、そして、三日間の疫病、このうちどれを選ぶかと言うのです。それはダビデが罪を犯していたからです。恐らくダビデは私たちも考えるように、７年間は長すぎる、３ヶ月も長い、三日間くらいなら何とか耐えられるだろうと、三つ目を選択します。そして、

そのとき７万人の人々が死ぬのです。その時ダビデは、主の恵みに拠り頼むことを決心し、この災いから民が救われることを願い、そのためなら、自分自身と家族にさばきが下るようにと主の前に願うのです。主は預言者ガドをもう一度ダビデのところに送ってこのように言わせます。エブス人が治めている土地、アラウナ、またはオルナンという人物の麦の打ち場に祭壇を築いてそこにいけにえをささげなさいと。ダビデはアラウナのところに行ってその土地を買おうとします。ところがアラウナは王が来られることを見てこう言います。**「王さま。お気に召す物を取って、おささげください。ご覧ください。ここに全焼のいけにえのための牛がいます。たきぎにできる打穀機や牛の用具もあります。」**と、ダビデはこのアラウナに**「いいえ、私はどうしても、代金を払って、あなたから買いたいのです。費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません。」**と言います。そして、ダビデは麦の打ち場といけにえと後にはその土地の代金を払って買い取ります。そこで彼は全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげるのです。そこで、なぜ、ダビデはアラウナの申し出を断ったのでしょう？皆さんはどう思いますか？家来がやって来てどうぞ差し上げます、土地もどうぞ、いけにえもたきぎも全部どうぞと、有難う、いい家来だと言ってほめるかもしれません。しかし、ダビデはそのようにしなかったのです。なぜなら、ダビデはこのいけにえの意味が分かっていたのです。いけにえをささげなさいとダビデが言われたとき、自分がささげるいけにえは自分の主への思いを反映するものだからです。なぜなら、主を愛する者は主のために最善のものをもって行こうとします。どんな犠牲が伴っても最高のものを神にささげたいとしたのです。ダビデは人が持ってきたものでは満足しなかった、彼は一番良いものをもって神にささげようとするのです。そのためにどれほど犠牲が伴っても、神は私にどれだけのことをしてくれたのか、その神にお返しするについてはどんなものも惜しくない、そうして彼は主の前に最良のものをもって行くのです。そして、主はそのいけにえを喜ばれるのです。もう一つ付け加えるなら、このダビデがいけにえをささげたところ、そこにソロモンが神殿を建てるのです。（Ⅰ歴代誌２１：１－２７、Ⅱサムエル２４：１－２４）

アベル：覚えておられますか？カインとアベルが主にささげものを持って来たときのこと…。その時に悲しいことに、カインのささげものには神は目を留めなかった、アベルのささげものに目を留めました。みことばはこのように言います。創世記４：４**「また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。」**と。みことばから判断できることは、恐らく、アベルは自分の羊の中で一番良いものを神にささげよう、それは神にふさわしいからと、カインはそのようにしなかったのです。もし、あなたがささげるものに関して犠牲が伴わないものでも良いと思うなら、それがあなたの主に対する思いです。ダビデが喜んで犠牲を払って主にささげものをしようとしたのは、これはダビデの心を現わしています。神の恵みに対する感謝であるし賛美であるし（和解のいけにえ）、同時に、自分自身の全面的な献身を現わしたのです（全焼のいけにえ）。そのような大切なことを主の前に誓うにあたって最高のものをささげたかったのです。

ノア：ご存じのように、彼は箱舟の中で生活し洪水が終わった後、その箱舟は乾いたところにつき、土地は乾きました。みことばが教えるようにノアは神とともに歩んだ人です。**「…ノアは、主の心にかなっていた。」**と創世記６：８にあります。このノアが箱舟から出たときに最初にしたことは、創世記８：２０**「ノアは、主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。」**でした。ノアもこのように一番良いものを持って来て、それを全焼のいけにえとして神の前にささげたのです。自らの献身を現わすことです。そして、神はそれをよしとされました。

アブラハム：**「主は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた。」**（創世記２４：１）と教えています。なぜ、神はアブラハムをそんなに祝したのでしょう？理由が記されています。創世記２２章、神はアブラハムに試練を与えます。**「神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」**（２２：２）と。アブラハムが最も愛する子をささげなさいと言われたのです。アブラハムはどうしたでしょう？彼は**「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」**と聞くイサクに**「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」**と答え、その場所にやって来ます。モリヤの山です。その祭壇の上にイサクを乗せて刀を振り下ろそうとしたときに、神はそれを見て、**「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」**（創世記２２：１２）と言われました。なぜ、神はアブラハムを祝したのか、この行為がどれほどアブラハムが神を愛しているかを明らかにしたのです。彼は主のために喜んで犠牲を払おうとしました。それが自分の最も大切なものだとしても、神さま、私はあなたを愛しています、なぜなら、あなたは私を愛してくださっているからと。

ですから、このように見たとき、ダビデにしてもノアにしてもアブラハムにしても、彼らが神から喜ばれたのは、彼らは喜んで自分にとって最も大切なものを主にささげようとした、それが彼らの神に対する思いだったからです。神が彼らを祝されたのは彼らの心が正しかったからです。そして、彼らの行為は彼らの正しい心から生まれてきたものだったのです。ですから、新約の時代を生きる私たちも神の前に同じことを問われているわけであり、私たち自身が考えなければいけないことは、私は信仰者としてどのような心をもって主の前を歩んでいるかです。私たちの主に対する奉仕、ささげもの、それが献金であっても時間であっても賜物であっても、私たちは喜んでそれを捧げているかどうかです。この人たちは神が最も大切だったのです。私たちはそのような信仰者でしょうか？パウロのことばを借りるなら**「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」**（ピリピ１：２１）と、彼はキリストは自分のいのちそのものだと言います。私のいのちは主のもの、この方が与えてくださった今日という日を神の恵みで、神を喜ばせるために私は生きて行きたい、神が私に与えてくださったものをもって、私はこの方をほめたたえて行きたい、なぜなら、父なる神は最も大切なもの、イエス・キリストを私たちの救いのために犠牲にしてくださったからです。神がもうそのことを実際に私たちのためにしてくださった、では、私たちはそれに対してどんな行為をもってその方に応答して行くのかです。こんな犠牲によって救われた私たちは何をもって主に自分の感謝を現わして行くのかです。それを自らに問いかけ、信仰者としての歩みを吟味し、恵みを感謝し、罪を告白して主を喜ばせる正しい歩みを行なう決心を新たにする機会である聖餐式は、だから重要なのです。あなたは心から主に感謝を捧げていますか？あなたは心から主を第一に愛しておられますか？それは、あなたの行動が、生き方が明らかにします。だから、パウロは教えたのです、形だけの信仰者であってはいけない、心の伴っていない信仰者ではいけないと。

◎神が喜ばれるささげものとは？

（１）自分自身を主に捧げる

みことばが教えるのは、まず、自分をささげなさいということです。ローマ１２：１に**「…あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」**とあります。クリスチャンである皆さん、あなたが神に捧げるべきささげものはあなた自身です。これはもう私たちのものではないからです。神のものだから、私は私のすべてをもってあなたに仕えて行きたい、すべてを自分のためではなく、主のためにする、自分のいのちも、からだも、持ち物も、才能も、賜物もすべては主のものです。主のためにすべてのことを喜んでしているでしょうか？私をあなたにゆだねますと自らを主にささげて主のために生きることです。それが私のために犠牲を払ってくださった神に対してふさわしい応答ではありませんか？

（２）従順

預言者サムエルがサウル王に対して言いました。**「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」**（Ｉサムエル１５：２２）、つまり、神が望んでおられることは、あなたが神に対して従順に忠実に従って行くことです。それがあなたが主に捧げることのできる主が喜んでくださるささげものです。あなたは喜んで主に従っておられますか？あなたの一番の喜びは主に従うことでしょうか？

大きなキリストの犠牲によって救われた私たち、もし、あなたが残りの人生を主に喜ばれるように過ごそうとするなら、何を主に捧げているのか、どのような心の態度をもって生きているのかを考えなければいけません。自分の心を吟味しなければいけません。ただのキリスト教という宗教を信じる者になってしまっていないか、生きた神との個人的な交わりを喜びながら、主よ、今日生かされていることを感謝します、今日私の為すことすべてをもって、あなたの栄光が現わされますように、私のことばも私の考えも私のすることもすべてを用いてください、ただ一つの目的のために、それはあなたが喜ばれるために、あなたがほめたたえられるために、あなたが人々の前で明らかにされるために、どうぞ、私のすべてを使ってください、そして、弱い愚かな私を助けてくださって、今日、あなたのみことばに忠実に従って行き、あなたの栄光を現わすことができるように、私のあなたへの感謝を現わすことができるように、私を助けてくださいと。そのように生きた信仰の先輩たちがいます。彼らは人生を無駄にしなかった、彼らの信仰は生きていました。問題は私たちです。私たちはこれからパンと杯をいただこうとしています。神が言われることは、あなたの心を吟味しなさい、罪がないか、あればそれを告白して、大きな犠牲によってあなたに祝福をくださった神に今からどのように生きて行くのか決心しなさいということです。私たちのすべてのものは主のものです。この方のために生きる人生こそ、救ってくださった神に私たちができるほんのわずかなことです。